

ています。調理されたおいしさだけでなく、本当においしいものは何もしくなく、驚くほどおいしいと、身を持って知りました。

このように、高坂農場で食の生産を体験したことは、私にとつて非常にいい経験になりました。私は大学に入学するまで、野菜とのつながりがスーパーにしかなく、完全に消費者側の人間でした。しかし今では、真夏のハウスの中で収穫したトマトや、凍えるような冬の寒さの中剪定したカキのことが、ふと思ひ出されます。作業中は地獄のようにだ！と思いますが、だからこそ経験が体に染み込んだのだと思います。生産者側としての目線も得られたことで、私の食への関心はより広く深くなりました。

私の今後の目標は、農業や食に対する



▲左端筆者

る人々の関心を高めることです。当たり前すぎて誰も気に留めないけれど、なぜ私たちが毎日豊かな食生活を送れているのか、もつと多くの人に考えてほしいです。そのために、私に出来ることはしていききたいと思えます。



懐かしの上名川演習林

岩見沢市在住

自営(樹木医) 泉 征三郎

(昭和42年林学科卒)

今ではマイクロバスが演習林宿舎に横づけされる便利な時代となりましたが、私達の50年前となる演習林の思い出は、林道の整備が遅れており、たゞ山道を歩いた記憶が一番に回想されます。しかし、演習林を流れる早田川の清流は格別豊かであった時代でした。演習林実習での宿泊期間はイワ

ナやカジカ漁を楽しませてもらいました。夜中に網をかけ二気に追い込み網を上げるとイキの良いイワナが次々にかかったものでした。そんな時代ですからラムシなどは、夜の酒盛りの肴として毎日つかまえてきたものです。そんな中での失敗談になりますが、森林経理実習で菊池捷治郎先生の指導により、林小班の林分調査を行うことになりました。「こちら二班、二班応答せよ」「こちら二班、現在赤マムシ二匹捕獲、二班はどうですか?」「二班はいまだ捕獲できず、今後頑張ります!!どうぞ!!」と交信していた時です。「君達は何をやっているのかネ!!早く調査にかかりなさい!!」菊池先生のおしかりの声でした。先生は管理舎の親機で、交信内容を全て傍受していたのです。

もう一つ、特に思い出に残るコマがあります。真夏の五連泊の時だったと思いますが、この間に



▲雪の研究で初冬の演習林(化物沢平坦地) 右から保坂(旧姓鈴木)技官、石橋先生、筆者



▲2林班内での森林経理学実習、右から及川君、大津君、筆者

何とか肉入りのカレーライスが食べられないかということになり、クラスで相談しました。その結果二ワトリを生かしたまま持ち込んで宿舎で飼育し、適当な時期に料理をすることになりました。そうは言っても、当時演習林までは路線バスで上名川に向かい、バス停から演習林宿舎までは山道を一時間近くも歩くものですから、路線バスに乗れない二ワトリを宿舎まで運ぶのは大変なことでした。そこで考え出したのがリヤカーでの運搬です。大学から演習林までですよ!!二人一組で何箇所かのバス停で交代して運び、ようやく日暮近くになって宿舎に着いた記憶があります。この二ワトリも三日目にはチキンカレーとなって食べられました。つらい思い出もあります。厳冬の大雪の中の長さ3.6mの竹竿5本の束を、積雪深調査の現地まで担ぎあげるアルバイトです。斜面を登る時はカランジキをつけても雪は胸の高さまであり、この時だけは過酷な体験でした。仕事を終えた後は、雪が屋根の高さ近くまである宿舎の玄関は、穴の底に降りるような状態です。暖房もなく、真つ暗な雪中の宿舎に、ローソクの灯りだけで夜を明かしたことは忘れられません。こんな色々な思い出がびっしりつまった演習林です。もう二度と訪れることができないと思っていました。三年前に大学の配慮により、ヤチハバまでご案内いただきました。感激いたしました。ありがとうございます。



▲昭和41年当時の旧演習林宿舎前にて同期の仲間



演習林の移り変わり

元演習林職員 保坂 良悦

農学部附属演習林は、農学部より国道112号線を約19km南進し、上名川集落から分岐し市道4km強を進むと演習林の入口に到達し、更に1km強進むと中央に位置する管理棟があり、面積は753haである。

演習林の前身は山形県が明治41年8月、林業振興を図ることを目的とし設置した県有模範林であった。当時の記録によれば大正元年より14年まで、スギ、ヒノキ、カラマツ等を154haに亘り造林が行われていたが、移管時の成林面積は98haで約四割は消滅し前世樹の広葉樹林となっていた。消滅の要因としては耐雪性に弱いヒノキを高海拔、豪雪地への造林、その後の保育が競争等により人手不足で十分に行われなかった事が挙げられる。

移管後は、国の拡大造林政策があり、演習林でも実施された事により森林面



▲現在の管理棟(昭和57年建設)



▲旧管理舎(左側学生宿泊室、右側教室)



▲旧管理舎(昭和24年～昭和57年)



演習林と森の民

秋田県立大学木材高度加工研究所

特任助教 瀧 誠志郎

(平成18年生物環境学科卒
平成20年農学研究科修了
平成25年岩手大学大学院博士課程修了)

山形大学在学中はもっぱら年輪解析ばかりをしていました。学位を取得後、現職については新しい森林管理手法

また、森林の緩やかな時の流れの中で、きつといつまでもそこに居てくれるのでしよう。いつの日か、「孫と谷地幅の話で盛り上がった。」なんてエピソードが聞けたら素敵だなと、思ったりもします。そんな時のためにも、これまでの演習林をしっかりと受け継いで、そして発展させていきたいと思います。

それともう一つ、昔の写真と二緒に見つけた、この木造時代の看板も。皆さんの思い出と共に。

積が拡大し、現在人工林面積は約120haまで回復し、以後は代採跡地に再造林を行い森林の維持・保全に努めている。

その模範林は昭和23年4月山形県立農林専門学校設立により、県から演習林としての使用が認められた。更に昭和24年5月山形大学の設立に伴い、山形県と国の協議により移管手続きが行われ、昭和28年4月、土地、立木、建物等一切が国へ移管となり、山形大学農学部附属演習林となり現在に至っている。

移管当時の施設といえば、木造の山小屋二棟であったが翌年に宿舍兼食堂の建物が新設され後に講義棟が増築された。昭和57年に講義室、食堂、宿泊室、事務室からなる鉄筋コンクリート二階建て管理棟が新設され、それまでの不便な生活から、電気、電話、簡易水道、テレビ等が整備され、演習林も文化生活が始まった記念すべき年となった。

このように、設備、施設も整っていないスタートでしたので、職員の勤務も夏季は徒歩から始まり、その後の自前のバイク、40年代前後からジープ、ワゴン車となり、冬季はスキーにカンジキを装置の装備で通勤が続き、40年後半にスキーモビル50年代より雪上車通勤と大きく変貌し、時代の推移を感じさせます。

また、森林の維持・管理に不可欠な林道整備を50年頃より順次整備され、右岸は谷地幅まで延長、左岸は昔沢から大荒沢へと周回し、幅員4mの林道

が完成した。併せて重機もハンドドーザー一台、車両もジープ一台から、ミニコンボ、ショベルドーザー、高所作業車始め各種の重機、車両が整備され各用途に活用され、41年余勤務の私にとっても隔世の感を感じた41年でした。

スタッフも、移管時に境界査定、森林計画作成等に尽力された斎藤定雄先生、山の親父渡部房生さん、研究一筋でした塚原初男先生も他界され、パワー抜群の遠藤治郎先生は新潟で、森の学校や冬期実習の充実に努めた小野寺弘道先生は札幌で御健在、実習、調査等で共に汗した上野清隆さん、佐藤八重治さん、阿部新一さん、上野齊さん、紅一点の遠藤文子さん、いずれの皆様も退職され、私を含め第二の人生を謳歌しています。

最後に演習林が文化庁から文化財建造物の修理に必要な資材のモデルに供給林および研修林として「ふるさと文化財の森」にスギ林26haが県内で初めて平成26年3月に設定されました事を報告し、つたない一文を終わらせてもらいます。

演習林の看板

山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センター
流域保全部門上名川演習林
技術員

新井 大輔

(平成18年生物環境学科卒)

「谷地幅に、車で来られる日が来るとはねえ。」

これは以前、昭和40年代卒業の同窓生の方が、当演習林の看板とも言える「谷地幅」に來られた時に、ふと掛けた言葉です。とかく、森林に流れる時間は緩やかで、いつの時代も変わらずに我々を楽しませてくれます。

私はこの文章を書くにあたり、まず演習林の過去を知る作業から始めました。と言っても、かつての演習林の写真を引つ張り出す事ぐらいいしかしておりませんが、その写真には、若かりし頃の先輩職員方が写っており、気づけば私は、「若い!」「先生の髪が黒い!」とかなんか一人一人で興奮しながらニヤニヤと見入ってしまった。その他に、木造の管理棟に、唯一の電源である大きな発電機。施工途中の林道。先輩方から聞いていた「昔の話」がそこに広がっていた。なぜだか懐かしくも感じました。

一方、現在の演習林はというと、管理棟は2階建て鉄筋コンクリートになり、陸の孤島だったこの場所には、あろうことか無線LANが導入され、誰でもインターネットが利用出来るようになりました。その他にも、最新の気象観測装置が設置され、演習林で観測された気象データがオンラインで閲覧出来るようにもなりました。また、特に革新的なのが、ライブカメラが設置されたことです。これにより、演



習林のHPにて、これまた誰でも、そして世界中どこに居ても演習林の様子を窺うことが出来るようになったのです。まあ、そのおかげで、我々技術職員は、いつでも「生懸命に仕事をしなければならなくなりました。(もちろん、以前から「生懸命」をしておりましたよ。)

急速な時代の流れは、加速度的に技術を発展させ、便利になり、演習林もまた時代のニーズに応じた変化を遂げてきました。便利になる一方、古き良き物も新しいものに変わり、昔を思い出させる物もまた、次第に消えていつしまっているのではと考える事もあります。

そんな折、冒頭でお話した卒業生の言葉が、ふと頭をよぎります。谷地幅の雄大な景色を望むには、徒歩で登るしかなかった頃も、車で横付けできるようになった今も、谷地幅はずっとそこに居続け、ここで学んだ全ての卒業生たちの「共通」の思い出になってくれています。

谷地幅だけでなく、管理棟の側に立つイチヨウの木、実習で植えたスギ達も